

ウェスレーのプラクティカル・ディヴィニティー

坂本 誠

筆者は、ウェスレーの神学思想を考察する場合に、当時ウェスレーが思想を表現するのに用いていたディヴィニティー (divinity) という用語が一体何を意味するのが重要な鍵となると考える。ウェスレーはどのような文脈でディヴィニティーを使用したのだろうか。また、ウェスレーが特に強調した経験的、実践的なディヴィニティーは何を意味しているのか。この論文では全体のテーマである神学者ウェスレーを考察する前提として、ウェスレーの語るディヴィニティーが何を意味したかを中心に考察したい。

1 ディヴィニティーの内容

ウェスレーはジャクソン版の著作集の中でディヴィニティーを79回使用している。その中で経験的神学 (experimental divinity) と表現しているのは3回であり、実践的神学 (practical divinity) は14回である。一方神学 (theology) は4回のみである。^{*3} このことからウェスレーの用語においてディヴィニティーの占める割合は決して小さいものではないことが理解できる。

ロバート・クッシュマンはその著 **John Wesley's Practical Divinity** (ウェスレーの経験的神学) の中で「17世紀におけるディヴィニティーの用語は神についての合理的な説明である神学とは異なる。むしろディヴィニティーは聖霊の啓発し回心させる業による主、救い主なるイエス・キリストの自己啓示を意味する。それ故に16～17世紀のディヴィニティーの使用法は人間の救いの方法や本質、福音を研究する神の救いの三位一体的教理である」と語っている。^{*4} 更にクッシュマンは、この使用法がカロライン神学者の神学 (divinity) に負っているのであり、これがアングリカンの先輩でもあるラティマーやクランマーにまで遡るとする。特にクランマーの意味していた「生きた信仰」(living faith) をウェスレーは視野に入れており、ウェスレーは生涯「生きた信仰」を模索した。「生きた信仰」とは、聖書の救いの方法を指し、聖書と伝統に基礎づけられたウェスレーの救済論、救いの教理を意味するとしている (Cushman・10)。筆者は、この概念はウェスレー

ジョン・ウェスレー (John Wesley 1703～1791) は18世紀の英国を生き抜いた人物であるが、ウェスレーは伝道者であり、説教者であり、メソジスト教会の創始者であるということを否定する者はいないだろう。しかし、ウェスレーが神学者であるという事に疑問を呈する人がいる事を聞いたことがある。確かにウェスレーはカルヴァンの綱要やバルトの教会教義学の大著は残しておらず、組織的に神学を構築するという今日の意味での組織神学 (theology) を認識していたかどうかは不明瞭である。^{*1}

しかし、ウェスレーはそれが将来彼の思想を知る手がかりとなるかは意識していたかどうかは不明瞭であるが、手紙、日誌、日記という形で自分の思想を残している。^{*2} 現代のウェスレー研究者はそのような所からウェスレーの思想をたどるしかないわけであるが、逆に言えば、ウェスレーはそのような形で彼の思想を展開していたと言う事は言いすぎであろうか。神学をただ単に理論として構築していくだけでなく、現代神学的に言えば、物語の神学にある意味で似た神学を実践的に展開するという手法を意識的にとったとも言えるのではないだろうか。

¹ 現代のウェスレー神学の代表的神学者トーマス・オーデンはウェスレーを組織神学者として紹介する。Thomas C Oden, *John Wesley's Scriptural Christianity—A Plain*

Exposition of his teaching on Christian Doctrine—, Zondervan Publishing House, 1994, p.20.

² オーデンによれば、このように説教という方法で神学を展開するのは当時の一般的習慣であったとする。Oden・22. 筆者も英国教会の他の神学者をみても、この意見は的を得ていると考える。

³ *The Works of John Wesley on Compact Disc*, Providence House Publishers, 1995.

⁴ Robert E. Cushman, *John Wesley's Experimental Divinity—Studies in Methodist Doctrinal Standards*—, Kingswood Books, 1989, p.10.

が使用した内的宗教 (inward religion) にも関連していると考ええる。^{*5} ウェスレーの目指したものは基本的には内的宗教であり、心の問題であった。ウェスレーの父親も内的宗教を追い求めるようにウェスレーに語った。但しウェスレーにおいては内的宗教から出発し外的宗教に至る過程が重要であり、そこにプラクティカル・ディヴィニティーの価値があると考ええる。

更に「聖書の救いの方法」(Scripture Way of Salvation) がもう1つの重要な用語となってくるが、ウェスレーはこの用語で何を意味したのだろうか。ウェスレーの場合、ディヴィニティーが救済論的に展開されていることが指摘されてきたが、筆者は救いの内容の解明が重要であると考ええる。聖書の救いの方法とは、救いの順序 (Order of Salvation) に則したクリスチャン信仰の成長の全体的プロセスを指す。そこには信仰と業、儀式的な形式主義と儀式にこだわらない福音的な自由な雰囲気をもったスピリチュアリティという相反するものが包括的に捉えられ展開されている。それは聖書の救いの方法に天国に至るという目標を持たせたことから明白である。^{*6}

さて、ウェスレーの神学を解明する為には当時の英国教会においてディヴィニティーはどのような意味で使用されていたかが重要になる。一般的に言えば、ディヴィニティーは神についての知を意味し、理論的なものだけでなく、経験までも含めた総合的なものを含めたものである。それに対して神学 (theology) は理論的な神学大系を意味するのではないだろうか。そういう意味でディヴィニティーは神学 (theology) を包括すると言える。確かにアングリカンには様々な神学的立場が存在しており、決して一つの立場のみを意味するものではない。しかし、筆者は理論的な神学以上に、教会全体の創り出す霊的な雰囲気であるスピリチュアリティが存在するのであり、そこにこそ教会のディヴィニティーが存在すると考える。^{*7}

特にその事は英国教会の持つ歴史性と関連する。マドックスはその著の中で、アングリカニズムにおいては様々な立場が歴史的な背景から見られるとする。元来カトリック教会との対話が常にあった英国教会は次第にヴィアメディアの思想に到達していったことを指摘する。^{*8}

最近のウェスレー研究の特色は、ウェスレーの使用していたディヴィニティーを当時の英国教会観から考察する時に、現代のグローバルなアングリカンとは違い、主に、4～5世紀の教会の正当な後継者として位置づけられていたと考える立場である。4～5世紀は東方教会の教父たちが活躍した時期でもあった。このような視点から、ウェスレー神学を基本的には東方教会のスピリチュアリティに近いディヴィニティーを持っていたというウェスレー研究が最近の主流となってきた。このことはウェスレーが聖化を完全化する完全 (perfecting perfection) と考え、目標に向かって成長する聖化論を展開したこと、罪を病と見て、病の治癒の過程を聖化の過程と考えていることにも現れている。確かに、東方教会のスピリチュアリティと英国教会のディヴィニティーには共通点がある。しかし、それがどれほど正確なものであるかは今後の両者の比較研究が必要になると考える。

次にウェスレーが使用した“experimental”という用語に関して述べたい。この用語は「実験的」とも訳せるし、「経験的」とも訳すことができる。ウェスレーは英国教会において生まれ、聖書、伝統、理性という3つの支柱に基礎を置いて、メソジスト運動を形成した。最も英国教会において、理性は広義に用いられており、理性は合理的承認のみではなく、共同体全体を通しての共同体的知、経験を内包している。確かにウェスレーの認識法の鍵概念は「エレグコス」であり、まだ見ぬものへの経験的信頼であり、理性的な教理への承認というよりも既に経験

のカルヴァンに比較できるような神学者はいないが、信仰や教理のみでなく、礼拝や個人のスピリチュアリティのある意味で基準となるとみなされる著作家が存在する」。それ故に英国には「英国教会の神学」‘Theology of England’ではなく、「英国教会の中の神学」‘Theology in England’が存在するのであり、多様性を保ちつつも教会全体の持つスピリチュアリティを大切にしていってディヴィニティーが存在するのである。

⁸ Randy L.Maddox, *Responsible Grace – John Wesley’s Practical Theology*, Abingdon Press, 1994. p.22.

⁵ 内的宗教に関しては藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年、9～10頁に優れた分析がある。

⁶ Kenneth J Collins, *The Scripture way of salvation – The Heart of John Wesley’s Theology*, Abingdon Press, 1997, pp13-17.

⁷ Edited by Stephen Sykes and John Booty, *The Study of Anglicanism*, SPCK/ Fortress Press, 1988, p.163. ブーティは以下のように語る。「アングリカンにはローマカトリック教会のトマス・アクイナス、ルーテル教会のルター、カルヴァン主義

を積極的に内包したものである。さらにウェスレーが共同体的知をめざしていた事はウェスレーの組会運動の採用等によって明らかである。しかし、ウェスレーの貢献は、他の英国教会の神学者に基本的には従いつつも、より積極的な役割を経験に与え、4番目の要素として加味したことである。ウェスレーが物事を判断していく順序は以下のようなものであった。第一に彼は聖書が自分の行動を承認しているかどうかを問う。第二に初代教会の精神や使徒的傳承を正統的に継承しているかどうか。第三に神によって導かれている経験と比較して、今の経験が有効であるかどうかを理性的に考察する。以上の要素がすべて合格ならば彼は一度それを試してみる。そして一度それが確認され、御心にかなった結実をもたらす経験的に体験できれば、どのような迫害があっても実行する。ウェスレーにはいくつかの認識上の関門があり、それを経ながら決断する彼の行動は理性的で冷静な判断を下せることになる。聖書、伝統、理性を最後の経験 (experience) において経験的 (experimental) に理解しながら検証 (experiment) するというものである。ウェスレー神学のダイナミックはこの4番目の支柱である経験にあると言っても過言ではない。経験は聖書、伝統、理性的承認を「生きた信仰」にする重要な要素である。ここに筆者はウェスレーの実践的な (practical) 側面を見る。ウェスレーが英国教会になかった経験を強調したことを見てきたが、これは以下のアングリカンの伝統とも一致する。

神学は神の知識というよりも神の生なのである。天においては、我々は最初に見る、そして愛する、しかし地上では我々は最初に愛さなければならない、そして我々は知覚し、理解する。⁹

つまり、神学は経験的に神の生を生きることとして展開されているのである。このことはウェスレーが聖化の本質を「自分のすべてを通して神を愛すること、「自分を愛するように隣人を愛すること」とした事とも関連している。

前述の「神の救いの方法、本質、福音の神の三位一体的教理」と「生きた信仰」、「聖書的救いの方法」、「内的宗教」および「神の生」は密接につながっているのである。ウェスレーのめざしていたディヴィニティーは、客観的に神を観察する

という神を語る (theos-logos) という主観-客観構造に基づいたものではない。むしろ神の救いが人間を変容し、刷新していくという既に人間が神の恵みの中に存在している主観-客観構造を超えたところに存在する「生きた信仰」の総体を神学 (divinity) と呼んだのである。

2 神の生としての神学の背景

ウェスレーの目指していたディヴィニティーが彼の生涯の中でどのように発展してきたかを考える時に、ウェスレーにおいて起こったことは神学を生きることではないだろうか。

初期のウェスレーにおいては教理的基礎づけが必要であった為か、ディヴィニティーをいかに展開するかにおいて、教理的な側面を強調していたように思う。それは義認と聖化を救いの順序の中でいかに理解するかというウェスレーが最も悩んだ教理の秩序づけにも現れている。ウェスレーは当時救いの確信を模索しており、義認と聖化の順序の逆転が起こっていることに気づかずに悩んでいた。幸い、義認が先で聖化がそれに続けて起こることが理解できるのであるが、教理の秩序づけによる救いの確信の確かさがウェスレー思想の関心事であった。しかし、後期になるに連れて、聖化論が個人の実存だけでなく、社会的な広がりを示すにつれて神学をいかに生きるかが重要になっていった。¹⁰ そのような傾向は、ウェスレーがメソジスト・ソサエティーを形成する時に英国教会の39箇条を25箇条に編集しているが、「使徒信条を信じる」という第8条を削除している事にもあらわれているし、ウェスレーが認識論において、「なぜ神が存在するか」という問いにはあまり興味を示さなかったことにも見られる。むしろウェスレーにとっては、「いかに神を認識できるか」という事の方が重要であった。また前述したがウェスレーの認識方法がエレグコスというギリシャ語から来る、聖霊の媒介にしたまだ見ぬものへの信頼であったことにも通じるのではないだろうか。

C・K・バレットはウェスレーの論理には一貫性が不足していることを指摘し、

¹⁰ Albert C. Outler, 'Methodism in Search of Consensus', in *What should Methodist Teach*, M. Douglas Meeks edited, Abingdon Press, 1990, Kingswood Books, 1990.p.35. (以下 *What should Methodist Teach* と表示)

⁹ Stephen Sykes and John Booty, *The Study of Anglicanism*, pp.116~117. これはジエレミー・テイラーの提案した神学として解説されたもの。

その原因がウェスレー神学が経験に基づいたところからきているとする。確かにウェスレーは義認の教理及び聖化の教理においても、確信を得たかと思うと、その不確かさに悩んでいる。バレットが言うように、ルターの場合には義認はすべての事柄に関わる。^{*11} しかし、ウェスレーの場合には段階的に義認と聖化を分けて考察する方法論が存在するのであり、この事も経験的に実験しながら、ウェスレーが神学を考察していた事の証拠である。しかし、これはウェスレーが教理に興味を持っていなかったということではないし、非教理化が起こったというものでもない。ウェスレーの神学の特徴が神学を生きることにあつたということの証拠である。

3 公同精神 (Catholic Spirit) について

ウェスレーのディヴィニティー理解について、もう一步踏み込んで述べたいが、それにはウェスレーがディヴィニティーを使用する場合に、特にプラクティカル・ディヴィニティーという用語をどのような文脈で使用していたかが問題となる。

そこで重要になってくるのが公同精神 (catholic spirit) という説教である。この説教はメソジスト・ソサエティー運動が次第に広がりを見せた時期に語られた説教である。メソジスト・ソサエティーの運動原則は「来るべき御怒りを避け、罪から救われたいという願望を持っていること」であつた。^{*12} ウェスレーは1746年の「公同精神」(Catholic Spirit) という説教で、公同精神を以下のように語る。

礼拝様式における様々な相違は全体的外的な一致を妨げるかもしれないが、それは感情をも妨げるのであろうか。意見が一致していないにもかかわらず心が1つにはなれないのだろうか。それ故、賢い人はその人が望むことを思考する自由を他の人にも許可するだろう。人は自分と異なる意見を持った人

を受け入れ、愛において1つとなりたいと望む人にただ1つの質問のみをする。「あなたの心は私の心があなたと共にあるように適切ですか。^{*13}

ここには、公同的な精神に立つエキュメニカルな視点が見られ、ウェスレーの幅の広さを見ることができる。実際、ウェスレーの組織したメソジストソサエティーには他教派の人々も含まれていた。しかしこれはどのような立場でもいいというのではない。

第一に公同精神とは思索上の広教会主義 (speculative latitudinarianism) とは異なる。それはあらゆる意見に対しての無頓着であつて、地獄の産物であつて、天の産物ではない。……第二に、公同精神が、どんな種類の実践上の広教会主義 (practical latitudinarianism) でないことを学ぶ。それは公同の礼拝について、あるいは、礼拝の外的な形式について、無頓着ではない。この無頓着も、祝福でなくのろいである (筆者傍点)。^{*14}

ウェスレーはここで、何の神学的な地盤を持たずにどの教理でも構わないという者とは違うという宣言をする。この言葉からもウェスレーは教理的な側面を重要視していたことが理解できる。ウェスレーが意識していたものは、英国教会に固有な神学と実践の包括性というものであり、何の教理にもコミットしない無節操を批判している。また第二に実践的であつても基本的なものに無頓着な人々とも異なる。礼拝様式等は祈禱書にあるように厳粛なものとして受け取りつつ、実践していくのであり、ウェスレーには礼拝様式においてこだわりがあるのである。岸田は特に二番目のプラクティカルという単語に注目し、ウェスレーがラティテューディナリアンをプラクティカルと批判しているとし、英国教会にはこのようにラティテューディナリアンをプラクティカルと批判する傾向が存在していたと考える。^{*15} 筆者もウェスレーの立場には自分が高教会派であるという立場が前

¹¹ C.K.Barret, 'Righteousness and Justification', in *What should Methodist Teach*, p.52,

¹² *The Works of the Rev. John Wesley, A.M.* 3rd edition ed. by Thomas Jackson (14 volumes), Kansas City: Nazarene Publishing House, 1872, VIII, p.270.

¹³ *The Works of John Wesley*, Edited by Albert C. Outler, Nashville: Abingdon Press, 1984. Vol2, pp.86~87. (以下 *BE Works* と表記)

¹⁴ *BE Works*, pp.92~93.

¹⁵ 岸田紀「ウェスレーと国教会低教会派——メソジスト運動の一背景——」より抜粋。これはウェスレー・メソジスト学会で1998年に発表されたもの。岸田は、教会史家 N・Sykes はラティテューディナリアンを実利的キリストと称し、やはりプラクティカルだと言う。一般的にはラチテューディナリアンは英国教会の諸儀式、規則および礼拝規定等を広義にある程度の許容範囲を持ちながら解釈した人々を指す。

提とされており、基本的にはウェスレーの信仰復興運動は低教会主義の特色を持つものと対立する高教會的なものであったことは認める。それ故にウェスレーは自分の立場はラティテューディナリアンではないと語っている。しかし、プラクティカルディヴィニティーを強調したウェスレーが、プラクティカル・ラティテューディナリアンを批判している姿は矛盾のように映る。ここでむしろ重要であったのは、自分の立場がラティテューディナリアンではないと確認した上で、自分の本来あるべき精神を説明したのである。その精神とは何か。ウェスレーは様々な事柄を本質と意見とに分ける。ここでウェスレーが問題にしているのは、意見の部分において異なっている、礼拝形式が異なっている愛をもって互いに協力していく姿勢なのである。まさに共同体的知がここには存在する。つまり、神学と実践の包括性、そこから生み出されるスピリチュアリティをウェスレーは重要視していたのではないだろうか。これが、ウェスレーの言う、聖書的救いの方法、プラクティカル・ディヴィニティーであった。ウェスレーを思索的、実践的に自分の立場を持たない広教派から区別したものこそ、彼の高教会主義的こだわりであり、無秩序な、また実体のない原則ではなく、実践的で且つ影響力のある方法化、規則化を強調した包括性がウェスレーのディヴィニティーを魅力あるものとしているのではないだろうか。英国教会に忠実なハイチャーチマンが、イギリスで最大の非国教派の指導者になったことは最大のパラドックスであるが、この伝統と実践の包括性の追求こそが、ウェスレーのプラクティカル・ディヴィニティーを解く鍵であると信じる。

4 ディヴィニティーの目標と聖餐の役割

さて、ウェスレーは聖書的救いの方法を強調しているが、これが彼のプラクティカルディヴィニティーの内容を指す言葉であったことは前述した。この聖書的救いの方法は何を意味したのか。聖書的救いの方法とは「天国への道」であり、幸福の岸辺にいかにか到着するという目標があり、この場合、「道」とは「様式」(mode)「方式」(fashion)を意味するものである(Collins・13)。ここからも、ウェスレーの聖書的救いの方法が神の生を生きる、クリスチャンの生の目標でもあることが理解できる。これは実践的な目標である。

ウェスレーが物事を経験的に理解していく場合に、聖書的救いの方法を実践していく3つの重要な要素が存在した。それは「魂の救い」、「心と生活のホーリネス」、「人々の生活における正義の実現」である。^{*16} 魂の救いは、ウェスレーの永遠の目標であり、彼がアメリカに行く動機も「自分の魂を救う為」であったし、自分の救いが確かなものになることはウェスレーのディヴィニティーの中心であった。全ての事柄は自分の魂が救われることから始まる。そして救われた者が、アンチノミアンのように、何もよき業に励まなくても自動的に最終的な救いに入れられるというのではなく、成熟の道をたどり、積極的に聖化の道を歩んでいき、心と生活の絶えざる刷新によるホーリネスを追求していく。心のホーリネスのみならず、それが生活にいかにか展開されていくかという点まで含めた全体的な刷新がウェスレーの求めていたものであった。その結果、人々の生活の中における正義の確立につながっていくのである。

筆者は特にこの3つには順序があり、ウェスレーが義認から聖化に至る過程において、心から生活へとつながる過程において、人々の生活の中における正義の確立に至る過程の中で聖餐の果たした役割に注目したいと考える。ウェスレーの聖餐の強調は生涯において見られるものであった。ホーリークラブには4つの活動があった。オックスフォードの牢獄訪問、貧しい家族の訪問、救貧院の訪問、恵まれない子ども達の為の学校の為の奉仕等である。そのような具体的行動の背後には法則化、規則化が存在した。それらの方法は(1)すべての人にできるかぎり善を行うこと、(2)機会のあるかぎりできるだけ聖餐を受けること、(3)国教会の断食日を厳守することであった。そこにあるものは慈善という考え方であり、聖餐と断食の必要性であった。ウェスレーは岸田が言うように、「祈り、断食、慈善」という高教會的な三種の「よきわざ」の「方法」化、「規則」化によって、「聖潔な生活」を組織し、「審判日」における「永遠の救い」への道である「キリスト者の完全」の「完全な愛」を追及したのである。^{*17} さらにウェスレーの聖餐式を重んじる立場はオックスフォードで強化されたとと言える。ジョン・クレ

¹⁶ Mary Elizabeth Mullino Moore, "Trinity and Covenantal Ministry" in Randy Maddox edit. *Rethinking Wesley's Theology—For Contemporary Methodism*, 1989, Abingdon Press, pp.156~157.

¹⁷ 岸田紀『ジョン・ウェズリ』ミルネヴァ書房、昭和52年、314~15頁。

イトンと共にホーリークラブを形成するが、ノンジュラーの立場に立つ彼は、同時に初代教会の礼拝の中心が聖餐であったことを認識し、それによって英国教会を改革しようとした。^{*18} ウェスレーの聖餐理解は基本的には高教会派のものであるが、ノンジュラーの影響をかなり受けている。当時の英国教会の主流は低教会派の聖餐観であり、これは秩序や儀式を強調しない形式的なものであったのではないだろうか。^{*19} ウェスレーにとって聖餐は義認を確認する場として高教会主義的影響の基にウェスレー自身に染みついてきたものであり、それを媒介として、心が生活につながるディヴィニティーが展開されていたのである。それが結果的には聖化につながっていたのである。そのことはウェスレーが3、4日に1度の割合で聖餐に与っていたことにも現れている。神への讚美が起り、キリストの御言葉が語られ、エピクレーシスの祈りの中で聖餐が行われる、この三位一体の神の具現がウェスレーのディヴィニティーを形成したと言っても過言ではないであろう。特に聖餐式は何千人もの人々が受けるのであるから、そこから発出するエネルギーが理解できると思う。クッシュマンの言う「人間の救いの方法や本質、福音に注目する神の救いの三位一体的教理」というディヴィニティーの実現がここに存在する。聖餐において養われた者が、恵みを携えてこの世に遣わされていく。聖餐のパンとぶどう酒は教会と世界、実存的聖化と社会的な聖化を結ぶものだったのではないだろうか。聖餐には高教会主義的立場を保持しながらも実践的に展開されたプラクティカル・ディヴィニティーが存在する。ウェスレーの運動は、英国教会の形式主義と熱狂主義の間をいく英国教会の改革運動であった。ウェスレーはそのことにより国家をも改革しようとした。この聖餐こそ、ウェスレーの運動を形式主義と熱狂主義から守ったものであり、プラクティカルディヴィニティーが具現しているものではないだろうか。

5 ディヴィニティーのルーツ

ウェスレーの中には実験的神学がいつ頃から芽生えていたのであろうか。これ

まではウェスレーの英国教会からの離反の影響を彼の幼少時からのピューリタンの背景にあると考えることが一般的なウェスレー理解であったように思う。

最近再販されたロバート・モンクの著書^{*20}によれば、ウェスレーにおいては、信仰と実践が常にクリスチャン生活において見られるが、神学と実践の包括性がウェスレーとピューリタンの共通の要素であるとし、ウェスレーの経験の強調もピューリタンからきたものと考えている (Monk・52)。さらに聖霊の証しは信仰の確信に必要なものとして認識され、ウェスレーは英国教会の立場と聖霊の証しを認めるピューリタンの中間に存在し、最終的にはウェスレーは穏健的なピューリタンの立場であると結論する。そのことは両者がクリスチャン生活を重要視していることにもあらわれている (Monk・70)。ウェスレーは時間の使用方法についてはウィリアム・ローやジェレミー・テイラーの影響を受けるが、それはピューリタンの強調でもある (Monk・145)。このようにしてモンクはウェスレーをピューリタニズムとの関連から捉えるのである。確かにウェスレーの実践性の背景には母親スザンナから受けたピューリタンの教育は否めず、バクスターの経験の神学の影響もあると考えることができる。

しかし、これだけで、ウェスレー神学のすべてを網羅することは不可能である。筆者はこの立場はウェスレーの高教会主義的な側面があまりにも軽視されており、特にウェスレーを穏健ピューリタニズムの立場と同一視することはウェスレーの神学的立場からも問題があるし、全体像から言えば無理があるのではないだろうか。何故ならば、ウェスレーは教理的にカルヴァン主義とは袂を分かっただけであり、彼の実践的な生き方においても、アルミニアン的な人間の応答責任を重要視する生き方の方が強いと考えるからである。

一方、ベーカーは、1729年をウェスレーが英国教会の外的権威から離反した転換点の年であると理解する。ウェスレーは1729年においてエプワースで牧会していて、牧会の困難さに出会い、外的な規則を守ることよりもジェレミー・テイラーに影響を受け、霊的な教訓をより重んじるようになったとする。^{*21} このよ

²⁰ Robert C. Monk, *John Wesley His Puritan Heritage Second Edition*, The Scarecrow Press, 1999.

²¹ Frank Baker *John Wesley and The Church of England*, Abingdon Press, 1970, p.23.

¹⁸ 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』日本基督教団出版局、1975年。

¹⁹ 岸田、前掲発表より抜粋。

うな早い時期にウェスレーの離反の要因の基礎があったとするベーカーの考えは興味深い。特にジェレミー・テイラーをウェスレー理解の鍵となる人物と考える筆者にとってことさらに注目したい。さらにベーカーは結論として「ウェスレーはできるだけ可能な限り教理と規則と礼拝に固執するが、彼（ウェスレー）が召されている特別な業につくように神に要求されるいかなる時でも、又いかなる場所でも多様性を持って行動するという原則を持っていたから」としている（Baker・324）。ウェスレーの実践性の中には、ピューリタンの実践の影響と英国教会に伝わる「生きた信仰」の要素があったことは間違いない。しかし、ベーカーは、ウェスレーの両親はピューリタンの教育方法を表面に出さなかったという結論であり、筆者もこの意見に同意する。

ウェスレーにとっては聖書等に示される神の意志に従うという法則が特別な業であり、教理や規則に優っている。そして神の意志との一致がウェスレーの目標であった。ウェスレーは野外説教、即興の祈り、組会、聖餐における讃美歌等の新しさを英国教会にもたらしながら、刷新された生活、慈善というものを包括的に理解して、²² 彼の実践性を生み出しているのである。筆者はウェスレーの中にあるこのような要素は、ピューリタニズムの影響を受けながらも、英国教会の先輩達から主に受け取ってきたものであると考える。

6 結語

ウェスレーには神学はあるのかという問いの中で、筆者はウェスレーにおいてはディヴィニティーという神学を表現する語が重要であると考えた。ディヴィニティーは、当時の文脈においては、救いの教理に関する三位一体的教理であり、聖書的救いの方法であることを指摘した。ウェスレーの多用したプラクティカル・ディヴィニティーは、英国教会のクランマーらが提唱した「生きた信仰」と共通したものであった。しかし、ウェスレーは英国教会の3支柱である聖書、伝統、理性を重んじつつ、体験をもう1つの支柱として経験可能な宗教を求めつつ、自分の信仰を検証して英国教会のディヴィニティーに基礎をおきながらも、様々

な実践を展開した。ウェスレーの初期は教理的な問いが中心を占めていたが、後には神学をいかに生きるかに焦点が合わされていった。これはウェスレーのディヴィニティーが実践的に展開された証拠であることにも関わる。

ウェスレーは立場的には英国教会の高教会主義に属しながらも、実践のない思索的な非形式主義、無秩序な実践における広教会主義を警戒した。その包括性が最もよくあらわれているのが、聖餐概念である。ウェスレーは聖餐を生涯強調するが、儀式を尊重しつつも、聖餐式を通して起こる信仰の内実を強調した。これがウェスレーを形式主義や熱狂主義から守ったものであった。ウェスレーの聖餐観はノンジュラーの影響を受けたことから来ており、そこに神学を生きる要素が存在した。ウェスレーの斬新さは、彼の中に規則にとられつつも、規則を超えたところに神の意志との一致を求めることにある。特にウェスレーには3つの中心が存在する。それは「魂の救い」「心と生活のホーリネス」「人々の生活における正義の実現」であった。ウェスレーは基本的には教理に固着しつつも、目標達成のためには様々なプラクティカルな実践を生み出した。ウェスレーには神学はあるのか。答えは勿論イエスであるが、ウェスレーのめざしていたものは、ただ単に学問的な知ではなく、礼拝等のスピリチュアリティのかかわる総合的な知であり、これを三位一体的に、包括的に展開しているのである。このことは、ウェスレーが神学者であると同時に、説教家、伝道者であることにも通じると考える。ウェスレーの語るディヴィニティーの復権こそ、21世紀の神学にとって重要な遺産であると考えられる。このウェスレーの包括性こそウェスレー神学の最大の魅力であると思える。

（日本基督教短期大学助教授）

²² Gregory Wainwright, 'Methodism and the Apostolic Faith', in *What should*

Methodist Teach, p.106.